ASLE-Japan ／文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

Feb. 1, 1999, No. 7

役員名簿（1998-1999）

◎代　表
　野田　研一（立教大学）
◎副代表
　山里　勝己（琉球大学）
　木下　卓　（愛媛大学）
◎書　記
　高橋　勤　（九州大学）
　結城　正美（豊橋技術科学大学）
◎会　計
　石井　倫代（芝浦工業大学）
　高橋　守　（国際武道大学）
◎監　事
　秋山　健　（プール学院大学）
◎ニューズレター編集委員
　大神田丈二（山梨学院大学）
　加藤　貞通（名古屋大学）
　赤嶺　玲子
　岩政　伸治（上智大学・院）
◎会誌編集委員
　上岡　克己（高知大学）
　Bruce Allen（順天堂大学）
　村上　清敏（金沢大学）
　伊藤　詔子（広島大学）
　木下　卓
◎運営委員
【大会・研究会運営】
　生田　省悟（金沢大学）
　岩井　洋　（酪農学園大学）
　近江　満理子
　太田　雅孝（大東文化大学）
　笹田　直人（明治学院大学）
　高田　賢一（青山学院大学）
　巽　孝之　（慶應義塾大学）
　土永　孝　（北海道大学）
　中村　邦生（大東文化大学）
　成田　雅彦（専修大学）
　西村　頼男（阪南大学）
　横田　由理（広島中央女子短期大学）
【研究助成】
　岡島　成行（讀賣新聞）
　石幡　直樹（東北大学）
　外岡　尚美（青山学院大学）

Fさんのこと　--水俣にて--

高橋　勤

「ほら、水面がもり上がっとるでしょ。海の底から水が湧き出しよるとです。」

チヌ釣りをしていた老人は、そう言うと、対岸の水際を指差した。

湯堂の港は、今でも海底の泉から清水が湧き出している。水量が多いときには、その海面がもり上がって見えるのだそうだ。湯堂湾では、この湧き水を利用して小鮎の養殖が行われてきた。水俣川には今でも鮎が上るらしい。

水俣の湯堂地区は、水俣病患者の最も多発した地区だった。

この春、水俣の湯堂地区を歩いていて、チヌ釣りの老人に出会った。ぼくがその老人に気を引かれたのは、おそらく海釣りという趣味のためばかりではなく、その老人が車イスに乗っていたからだろう。老人とぼくは釣りの話をしていたのだが、どうした訳か、この老人はぼくを自宅へと招くと言い出した。湯堂湾で釣れたばかりのチヌの刺身で一杯やろうというのである。水俣湾の広大な埋立地から今だに汚染物質が流失しているという噂は耳にしていたのだが、ぼくは快く老人の誘いに応じたのだった。

Fさんの自宅は、港から国道三号線を隔てた出月地区にある。数軒先には、水俣病裁判の中心的な存在だった川本輝夫さんの家がある。坂道をもう少し上がると、水俣病運動の拠点となった相思社である。

Fさんの奥さんは小柄でもの静かな方だった。その静かさのなかに深い悲哀とやさしさが秘められているような気がした。40を過ぎた息子さんは、まだ独身である。

「わらびば採りにいくでっしょ。そいで丘の上から海ば見たら、虹色に輝きよりましたも。虹色ちゅうても、へんな虹色です。そんころから海の汚れとりましたとでっしょうな。はじめん頃はひどかったとですよ。奇病、奇病ちゅうて。ちいと手足のしびれても誰にも言わんやったとです。子供は就職のでけん、嫁のやり手はなかちゅうた具合ですけん。」

「おれもそん頃から症状はあった。ばってん、子供に迷惑のかかるけん、申請はせんと思うとった……。」Fさんはそうつぶやいた。

Fさんとぼくは、水俣病のことはそれ以上話さなかった。ぼくは何を尋ねていいかわからなかったし、色々と聞くのが失礼のような気がした。ただ、Fさんが「大学教授でさえ、金と権力の手先でしかない」と吐き捨てるように言ったのだけは覚えている。

Fさん自慢のハチミツ入りの焼酎を飲みながら、ぼくたちは戦争の話をした。太平洋戦争の間の6年、Fさんは中国にいた。その6年間の間に、

Fさんの所属する部隊は満州からビルマまで徒歩で南下している。敵を追跡した時は夜も寝ずに歩いたという。何日も寝ずに歩く。仮眠がとれるのは15分の休憩の時か、それとも歩きながら寝るかのどちらかだった。鉄砲を担ぎ、食料の米を背負い、夜を徹して野山を歩く。そんな時は、敵の部隊が立ち止まり交戦してくれるのを心から願ったという。日本に届いた名誉の戦死者のうち、三分の一は病死、あとの三分の一は発狂するか、自殺者だった。お守りも千本針も捨てた。重かった。「死ぬかもしれない」と思いながら捨てたそうだ。だから、もう神様も宗教も信じない。そのときそう思ったのだそうだ。

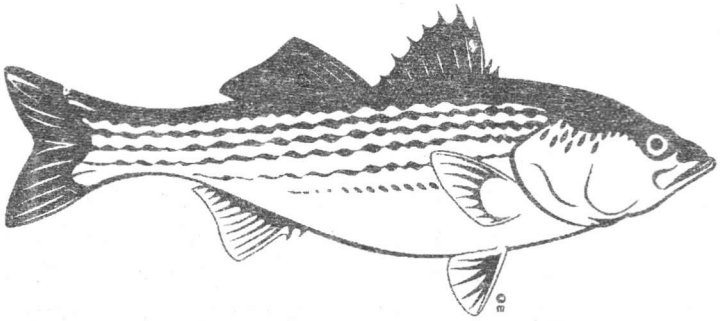
Fさんの家には、仏像の写真が何枚も掛けられていた。

「宗教心というより、あれば見とったら、心が安らぐとです、」とFさんは言う。それが宗教心というものだろう、とぼくは心のなかで考えていたが、あえて口には出さなかった。

「水俣に環境大学ば作ろうと思うとうとです。国立の環境大学ばです。市役所の連中は、また変な学生やら赤軍派の来るち言いますばってん、そげなことはもうなかとです。水俣に環境大学ば作って、環境問題ば研究する世界の拠点にしたらよかとです。」

環境大学の創設を思い描くFさんの語気は高ぶっていた。ぼくもその構想に興奮し、できるならお手伝いがしたいと申し出た。Fさんとの話はいつ終るともしれなかった。その間中、奥さんは嫌な顔ひとつせず珍客を温かく迎かえてくれた。お宅を失礼したのは、もう夜中の12時を過ぎていた。

ぼくは1ヵ月ほどしてFさんに2通の手紙を書いた。1通はお礼の手紙だった。そしてもう1通は、奈良の秋篠寺で買った技芸天像の写真を送った。



UGA便り

石幡　直樹

Atlantaから西に100キロほど離れた、米国Georgia州北部のAthens（近くにはRomeもあります）にあるUniversity of Gerogia（1785年創立、学生数約3万）にフルブライターとして8月末より一年間滞在することになりました。UGAには自然系のEcology学部がありますので、そのカリキュラムの一部を今年度の時間割から拾ってみました。ほとんどの科目が講義と実験の両方を組にして履修するようです。Environment Issues, Ecology, Vertebrate Natural History, Ecosysytem Ecology, Mammalogy, Herpetology, Ichthyology, Invertebrate Zoology, Conserv(ation?) Sus(taining?) Dev(elopment?), Ecology Concepts, Wetland Ecology, Stream Ecology, Comm(unity?) Ecology, Problems in Ecology, さらにInternship, Senior Seminar, Master's Research, Doctoral Research, Doctoral Dissertation などの項目も見られます。多くて20人から30人の理科系のクラスですので、のぞき見する勇気もなく内容は分かりませんが、日本でも環境学部や学科などがあって似たようなテーマで研究教育をしているのだろうかと考えてしまいました。

私が所属しているのは比較文学科ですが、その学科長Betty Jean Craig女史は人文芸術センター長も兼任しています。同センターの今年度の（短期）客員講師陣にTerry Tempest WilliamsとFrederick Turnerの名前がありました。二人とも一週間ほど滞在し、Williamsは10月29日に大学の美術館で講演と朗読を、Turnerは10月22日に「宗教と未来」という講演をする予定です。Williamsは*UTNE Reader*（このUTNEが何の略称か分かりません、どなたかお教え下さい）では'visionary'で、あなたの人生を変えるかもしれない詩人との評価を得ていると紹介されています。Turnerはテキサス大学人文科学部教授で学者、詩人、批評家、環境活動家で、最近は環境回復に力を注いでSociety for Ecological Restorationの指導的立場にあり、*Restoration and Management*という雑誌に筆をふるっているとのことです。できましたらまた続報などお届けしたいと思います。

現代ネイチャーライターの肖像

ノーマン・マクリーン

前川利広

ノーマン・マクリーン(Norman Maclean, 1902-1990) の紹介をと頼まれた。私は最近ほとんど強要されて入会した新参者なのと、いまさら必要あるのかなという気持ちがあったのとで抵抗したが、押し切られた。必要とはつまり代表作 ("A River Runs Through It") が映画化されているだけでなく、すでに立派な紹介が渡辺利雄氏によって書かれており、それは日本でおそらく最良のものと思われたからである。二冊の本、『マクリーンの川』(集英社、1993)と『マクリーンの森』(集英社、1994)は、*A River Runs Through It and Other Stories* (U. of Chicago P., 1976) の訳であるが、それらに付されている渡辺利雄氏の「訳者あとがき」はマクリーンの経歴と出版の経緯、作品の特質を伝えて無駄がなく、気品は高い。さらに書くべきなにが残っているだろうか。「ASLE－Jというのは全く学術的な団体というわけではないのでしょ？」と確認した上で、ここに学術的ではないものを書くことにした。

私は"A River Runs Through It"のみで一冊のハードカバーになった本を持っている。Barry Moser という人の木版によるイラストが10数枚挟み込まれており、表紙には毛ばりの浮き彫りがあしらわれた美しい本である。作品に描写されている渓流のイメージとマッチして、本全体がひとつの美術品という趣がある。しかし私がマクリーンを知ったのはこの物語によってではない。モンタナ州ヘレナに近いロッキー山脈で発生した山火事と13名の若者の死を描いたノンフィクションの傑作によってであった。それは*Young Men and Fire* (U. of Chicago P., 1992) という題名だが、これについては渡辺氏も軽く触れている程度なので、ここに書くことの意義はありそうである。

1949年盛夏、マン渓谷の草木は乾燥しきっていた。落雷から発生した山火事は初めのうち小規模だったが、乾燥と強風のため思いの外速く燃え広がった。拡大を防ぐ作業のため飛行機からパラシュートで落下した15人のスモークジャンパー(降下消防隊員)と1人の森林警備員は逃げ遅れた。岩だらけの急な斜面をずり落ちながら駆け上がる若者達の脚より、急迫する炎のほうが勝ったのである。かろうじて火よりも速く尾根にたどり着いたものには、恐竜の背骨のように露出した岩が行く手を阻んでいた。岩の壁沿いに走って裂け目を探すうちに炎に包まれたものもいた。炎が通り過ぎた後、焼けぼっくいになった腕とボロをまとったかのように焼けた肉をぶら下げて、彷徨しているものもいた。救援の人間に出会うと、自分の有様を見られたくないために、近寄らないでくれと嘆願したという。生き残ったのはまだ十代の2人の若者と、エスケイプ・ファイアーを放った分隊長のダッジだけだった。

Young Men and Fire はこの惨劇をあらゆる角度から克明に調べ上げた記録である。本の後半になると山腹を駆け上がる隊員の速度と、彼らを追って燃える炎の速度を計算する数式まで出てくる。翻訳は難しいだろうと思っていたら、その部分を省略したものが昨年出た。水上峰雄訳『マクリーンの渓谷』(集英社、1997年)である。

1996年7月末、私は家内とともにモンタナに入った。ヘレナでレンタカーにガソリンを入れながら、隣で給油している男に経路を尋ねた。インターステイトを下りて、さらにまた訊いた。ミズーリ川を船で下った。13人の犠牲者を出したマン渓谷には、船を停めることはできない。13の十字架が立つところに達するには、山中でのキャンプが必要である。手前のメリウェザー・キャニオンで下船し、ひとつ南側の山(ここで落雷があり、火災が発生し、炎はマン渓谷を越えた)を登り、頂上から現場の斜面を眺めおろすしかない。

家内をメリウェザー・キャニオンの川辺に残し、昼食用に買っておいたホットドッグとミネラルウォーターのボトルをリュックに入れ、登山道を探した。たった1人。高度が上がるに連れ、緑色に蛇行するミズーリ川が下に小さくなってゆく。あのときの山火事のなごりだろうか、途中何本もの木が焦げたまま立ち枯れていた。大きな奇岩が口を開けている。Devil's Kitchen と書かれた小さな札が掛かっていた。このあたりには毒蛇が生息するという。もし噛まれて動けなくなったら、家内はどうするだろうか。47年前ここで死んだ者たちはほとんどが十代後半から二十代前半の若さだった。彼らのつかの間の人生は、なんの意味があったのだろうか。そんなことを考え、ズリ落ちる石に足を取られながら細い山道を登った。

山頂に立って向かいの斜面を見下ろした。その尾根を越えると草原がロッキーの山々にとって変わり、草原はどこまでも続いてやがてカナダとの国境を越えるはずだ。そして青い空はそのままカナダに連なる。自然は人為的な国境なぞまったく意に介していないとでもいいたげである。私は途方もない大きさの自然を望みながら、人の死について、ひいては生について考えていた。生は死と切り離されて存在しているわけではない。13人の生命はつかの間であったが、悠久の自然と較べれば70年の生命も同じようにはかない。なのに

人は生に執着する。生の長さは何の意味を持つのだろう。死をみつめない生は生でない。コインの表裏のように生と死は対になっている。永遠の生は生ではない。

人は人の死に接したとき、なにがしかのことを学ぶ。他人の死によって、自らの生を認識する。"A River Runs Through It" を読めば感じられることだが、マクリーンの生は弟ポールの死を見据えたところに存在したと思う。また13人の若者の死の過程を追っていたとき、おそらく彼は自分自身の生を、そして死を考えていたであろう。

日差しが厳しい。私は木陰に入って座り、昼食を摂った。水を飲んで一息つき、幾枚かの写真を撮った。左側にミズーリ川が小さく遠く、北に向かって流れている。死者の出た山腹の右側は起伏がなだらかになっている。パラシュートで降下したあたりの見当がおおよそつく。見事な自然だった。私の足元には岩石がごろごろしている。握り拳大のものを手に取ってみた。一面が焦げているかのように変色したライムストーンであった。日本まで持って帰るには重いかも知れない。そう思いながら、ほとんど空になったリュックに石を入れると、リュックはその部分が重みでズッシリと垂れ下がった。

書誌情報

◆八田洋章著『木の見かた、楽しみ方――ツリーウォッチング入門』（朝日選書599、1998年）自然に関心を抱く第一歩として、自宅の庭にある木をながめ、職場の樹木や街路樹に視線を向けようという試みが、わかりやすい語り口調で展開されている。一目ぼれした木に、「これ、私の木！」とツバをつけて一年かけて観察してみたくなる、そんなきっかけを与えてくれる本。（近江満里子）

◆石牟礼道子『天湖』（毎日新聞社、1997年）ダム建設のために湖底に封印された天底村をめぐる、神話と蘇りの物語。九州の山村 に、祖父の盆供養のために東京から来た音楽家志望の青年は、そこで母娘おひなとお 桃の歌を聞き、心を癒される。天と地をむすぶ水の循環を断ち切るダム、耳を麻痺 させる都会の喧騒。現代社会は環境と人間をひきさく要素で満ち溢れているが、天底の人びとは果敢に魂の故郷を現代に再現させる。詩的で音楽的な水辺の世界。（赤嶺玲子）

◆森崎和江『地球の祈り』（深夜叢書社、1998年）女性のエロスや朝鮮での植民地体験を描いてきた著者が、自然を聴くことをうたった 詩集。木、土、水、空との対話は、生命の気配に満ちている。エコフェミニストのよ うに自己の性と自然とのかかわりを理論化することなく、人間の言語をもたない木や石に語りかけるように平易な言葉で綴っている。幼いものたちに読ませたい。（赤嶺）

◆足立倫行『森林日本』（新潮選書）森林の荒廃を告発するだけではなく、現場の人間の姿を通して問題の本質をとらえたい。漁民による植林、都市住民による森林ボランティア、農民による地域文化・農業振興とイヌワシ営巣地保護運動等、希望はまだある。（加藤貞通）

◆マイケル・アラビー編『エコロジー小事典』（今井勝・加藤盛夫訳、講談社ブルーバックス）ダイオキシン、温室効果から遺伝、気象、地学など基礎分野まで5000項目を集録。（加藤）

◆牧野和孝『鉱物資源百科辞典』（日刊工業新聞社）地球上に存在する鉱物、約4300種類そのすべてを収めた、きめ細かい鉱物辞典。特定の分野に限らず広く利用できる。（加藤）

◆米田一彦『生かして防ぐクマの害』（農文協）生息地を狭められ、有害獣として駆除され、ついにニホンツキノワグマも、オオカミのように、最近ではニホンカワウソのように姿を消す日が来るのか。共生への実践。（加藤）

◆植田和弘『環境経済学への招待』（丸善ライブラリー、1993年）環境を保全しつつ人間社会の豊かさを実現する経済は、いかにしたら可能か。文学と環境の論議を、社会経済的リアリティーと遊離させないために、これは必読。（加藤）

◆千葉徳爾『オオカミはなぜ消えたか』（新人物往来社、1995年）日本人と野獣 の交わりについての民俗学的考察。（加藤）

◆『週間金曜日』編集部『環境を破壊する公共事業』（緑風出版、1997年）かけがえのない環境をかくも破壊してきた“公共事業”とはなにか。北海道から沖縄までその状況の報告。（加藤）

◆ジリアン・ビア『ダーウィンの衝撃：文学における進化論』（渡部ちあき、松井優子訳、工作舎、1998年）『種の起源』をフィクションとして読む。（加藤）

◆まる虫ネコ『まんが第十堰--まるまるわかる吉野川河口堰問題』（まんが第十堰刊行委員会）公共事業はすでに計画立案当時の目的が失われているのに「一度決まったものだから」と強引に進められ問題を引き起こすものがいくつかある。四国の吉野川可動堰化計画もそのひとつ。（加藤）

◆管啓次郎『狼が連れだって走る月』（岩波書店、1994年）今福龍太とともに日本でもっとも早い時期の真率なアビー論の書き手。エッセイ「砂 漠で暮らした昨日」のな

かにアビーがいる。管啓次郎の〈場所論〉（例：「土地　記憶欲望」『場所―現代哲学の冒険7』、岩波書店、1991）はもっともっと注目され　ていい。バリー・ロペスや生態地域主義にも接する重要な仕事。アリゾナに暮らす著者の感性と文体が何とも妬ましい。（野田研一）

◆宮迫千鶴『海と森の言葉』（岩波書店、1996年）画家で都市を愛していたはずの宮迫がいつのまにか自然派に転向していた（？）。アニー・ディラードを愛読する日本の作家がついに現れた。宮迫の今後が注目される。日本の作家がもっとアメリカのネイチャーライターを読み、かつそれを越える作品を書けばそれでいいのだ。（野田）

◆多木浩二、今福龍太『知のケーススタディ』（新書館、1996年）文句なく魅力的な学者二人の対話集。とりわけ最初の章「動物」は刺激的だ。「トロープ（比喩）としての動物」、「平行世界としての動物界」など、バリー・ロペスや動物文学を考えるには、こうした視点がもっと拡大・深化されねばならない。（野田）

◆ロバート・フィンチ、村上清敏〈会員〉訳『大切な場所―ケープコッドの四季』（松柏社、1998年）まったく独力でフィンチ、ベストンの翻訳を成し遂げつつある村上氏のフィンチ2 番目の翻訳。ネイチャーライティングを読むとは、このような文章を熟読玩味する喜びなのだと改めて思う。メルヴィル学者の学殖がにじみ出た翻訳に脱帽する。（野田）

◆伊藤詔子〈会員〉『よみがえるソロー―ネイチャーライティングとアメリカ社会』（柏書房、1998年）日本で最初の本物のネイチャーライティング論。記念碑的著作であると同時に、質・量ともにこれを越えることが、宿題として私たちに課せられた。「自然を文化の本質と捉える構造」をアメリカ文学の大きな潮流として摘出する労作。あまたの書評が待たれる。（野田）

◆ゲーリー・スナイダー、山尾三省、（監修：山里勝己〈会員〉）『聖なる地球のつどいかな』（山と渓谷社、1998年）太平洋を隔てながら（そしてともに辺境に暮らしながら）、まるで同時代感覚を生きている二つの個性。親しく、懐かしく、貴重な対話だ。いま、ネイチャーライティングをこのクニで考え始めたぼくらにとって、スナイダーとは誰か。また、屋久島で暮らす山尾三省とは誰か。二人の対話の間から、日本の知られざる日米戦後史が見えたと思うのは錯覚か。それじたいが緑陰のごとき書物。（野田）

◆『現代思想1998,5―特集：環境破壊』環境破壊をめぐる思想家（石牟礼道子など）の特集。特に、エコフェミニズムを環境破壊に関する思索の中心として捉えたところが新鮮。海外の思想がどのように日本に輸入されているかを知るのにも役立つ。雑賀恵子「女―身体になる：エコフェミニズムの稜線」は、エコフェミニズム理論のぎこちなさ危なっかしさにも触れていて、興味深い。（赤嶺）

◆石牟礼道子『水はみどろの宮』（平凡社、1997年）分析や解釈をやめてしまいたくなるほど情緒的な文章。懐かしい村の風景と、可笑しく哀しい人間と動物のエピソードの数々。日本にこのようなストーリーテラーが現存することを、嬉しく思う。（赤嶺）

◆Foulke, Robert. *The Sea Voyage Narrative.* New York: Twayne Publishers,1997. 航海誌というのはかなり歴史が古いのですが、しばしばネイチャー・ライティングの歴史からは無視されがちです。Moby-Dickを頂点として見がちなアメリカの 海の文学はかなり錯綜した歴史を持ち、その伝統にはまだまだ多くの名作が眠っています。この本はそのような背景を垣間見せてくれます。（山城新）

◆Branch, Michael P., and Daniel J. Philippon, eds. *The Height of Our Mountains : Nature Writing from Virginia's Blue Ridge Mountains and Shenandoah Valley.* Baltimore: Johns Hopkins UP, 1998.ジョン・スミスからジョン・ダニエルまで、四世紀にわたるヴァージニアの自然をめぐる文学70編を収めたアンソロジー。充実したイントロクションで "bioregion," "place" をはじめとするキーターム が丹念に論じられている。（結城正美）

◆*Green Culture: Environmental Rhetoric in Contemporary America* eds. Carl G.Herndl & Stuart C. Brown. The University of Wisconsin Press, 1996.エコクリティシズムは環境的文化批評から、ハードな環境問題、ネイチャーライティング批評等大きな巾があるが、文学研究の中枢に位置する課題である環境的修辞を扱った重厚な論文集で、スコット・スロヴィック他各分野の専門家が執筆している。各章のテーマは、環境的アポカリプス、擬人法、環境政策の論理、風景美学、環境的認識論、自然の記号論的表象論、環境教育、リスクコミュニケーション論等多彩かつ刺激的で、今後それぞれの分野についてより詳細な議論を展開する批評書がでるだろうが、その指針となるよい論集。（伊藤詔子）

◆Rainy, Sue. *Creating Picturesque America: Moment to the Natural and Cultural Landscape* Vanderbilt University Press,1994. 1873年、アップルトン社から出版されたPicturesque America 2巻本は、日本でも 本の友社から野田氏の編集で復刻され、１９世紀半ばより特に南北戦争後のアメリカ の風景美普及に強い影響力を持ったいわゆるピクチャレスク本の集大成としてよくし られている。本書はこの本の成立過程を文化的背景から出版事情、絵画と写真との関係、アメリカ的風景美学と民主主義、ナショナリズムのイデオロギー性等を、１１５葉の原本版画イラスト紹介とともに論じたもの。絵画芸術と社会がいかに強くむすび ついているかわかり、ネイチャーライティング理解も深まる。（伊藤）

◆Bass, Rick. *The Sky, the Stars, the Wilderness.* Boston, NY: Houghton Mifflin,1997. タイトル・ストーリーの他に、"The Myths of Bears," "Where the Sea Used to Be"の2編を含む短編集。幼い女主人公の母親が死ぬ間際に、自分を「埋葬」するのではなく、「植え」てほしい、と頼んだエピソードから始まるタイトル・ストーリーは、リック・バス初の、女性と大地の関係を取り上げた注目すべき小説。（近江）

◆（雑誌評論）Bennett, Michael. "Urban Nature: Teaching 'Tinker Creek' by the East River" Interdisciplinary Studies in Literature and Environment.Vol.5.1, Winter 1998. ISLE学会誌に掲載された論文。ＮＹ の大学で教鞭をとる著者が、Ａｎｎｉｅ

Dillardの*Tinker Creek*に対する学生の反発をきっかけに、「urban natureなんてものがあるのだろうか？」という素朴な問いへの"Yes"という答を導き 出す過程が論じられている。研究論文のわりには、まことにとっつきやすい。（近江）

◆Seibert, Charles.*Wickerby: An Urban Pastoral.* NY: Crown Publishers,1998. Humorous, satirical, "Wickerby" deals seriously with urban and rural images of nature; often poking fun at Waldenesque and old-fashioned, romanticized visions of nature-even as this city-loving author describes his six months of living in a country cabin-and his return to the city. Post-nature-writing nature writing? Anti-nature-writing nature writing? Great reading. (Bruce Allen)

◆Gessner,David. *A Wild, Rank Place: One Year on Cape Cod.* Hanover, NH: University Press of New England, 1997. In the tradition of Robert Finch, Gessner weaves together the natural history of Cape Cod with the unfolding inner history of his life and the people of the Cape. The story of his own successful fight with cancer, and his father's losing fight with it, provide the background for a tale of inner discovery linked with discovery in the natural world. (Allen)

◆Raban,Johnathan. *Bad Land: An American Romance.* NY: Vintage Books, 1997.Winner of National Book Critics Circle Award for Nonfiction. Evokes the lives, dreams and land of the early settlers of the dry plains region of the US and how this land and its people have changed up to the present. A personal memoir, mixed with history and criticism. (Allen)

◆Booth, Alan.*Looking for the Lost: Journeys through a Vanishing Japan.* NY: Kodansha International, 1996.The late Alan Booth-known as the best travel writer on Japan, also deserves to be known as one of Japan's best contemporary nature writers. His travel memoirs provide keen descriptions of the lives of ordinary Japanese and of vanishing parts of the countryside. Often sharply critical, but humorous, and rich in perceptive insights. (Allen)

◆A Place Apart: A Cape Cod Reader, edited and with chapter introductions by Robert Finch. NY: W.W. Norton, 1993. An anthology of Cape Cod writing containing over 150 selections by 67 writers; ranging from early Indian oral tales to contemporary writing. Instructive commentary by Robert Finch. A good starting place for Cape writing, and it includes many interesting selections by lesser-known and hard-to-find writers about Cape Cod. (Allen)

◆Richardson, Wyman.*The House on Nauset Marsh.* Woodstock Vt.: The Countryman Press, 1997. (originally published; 1947). Recent re-issue of a classic of Cape Cod nature writing. In the tradition of Henry Beston. Richardson was a distinguished physician who balanced his busy life with observations and reflections on the natural world. (Allen)

◆Turner, Jack.*The Abstract Wild.* Tucson: U. of Arizona Press, 1996. Provocative, elegant, intellectually engaging essays on the nature of the wild, written by one of its most articulate and outspoken supporters. Calls for the "real" wild, which is experienced-in contrast to the increasingly common "abstract" wild, which is only intellectualized. (Allen)

◆Botkin, Daniel K., *Our Natural History: The Lessons of Lewis and Clark.* NY: Grosset/Putnam, 1995. Retraces the journeys and journals of Lewis and Clark, through the eyes of a modern ecological scientist who writes with great clarity and beauty. Informs equally about both modern environmental sciences--and the myths and realities of the past. (Allen)

◆Raymo, Chet. *Honey from Stone: A Naturalist's Search for God.* Saint Paul: Hungry Mind Press, 1997. (originally published; 1987). Written by an astronomer who writes like a poet; a religious skeptic who sees the essence of religious awe in the natural world. Raymo's meditative essays blend science, wonder and the landscape of Ireland. (Allen)

◆Tallmadge, John. *Meeting the Tree of Life: A Teacher's Path.* Salt Lake City: U. of Utah Press, 1997. Records Tallmadge's struggles to integrate what he has learned from the natural world into his daily life and, in particular, into his teaching-often facing difficult professional obstacles. (Allen)

◆Anderson, Lorraine/Slovice, Scott/O'Grady, John P. *Literature and the Environment: A Reader on Nature and Culture*(Longman). 構想から完成までの長い歳月と、数十人の専門家による査読によって今 年遂に出版されたアンソロジー。文学的な作品のみならず歴史的な文章 も取り上げられている。たとえば動物の権利に関する専門家の議論がハーパーズマガジンから転載され、授業時のディスカッションに背景的な 知識を与える配慮がなされている。一握りの作家だけがこのような問題について考えているのではなく世界中の人々がこれらの問題について考えているのだという思想によって貫かれている。いまなら教師用指導書も付いてきます。注文などの問い合わせ先：
"Katharine H. Glynn" <KGlynn@compuserve.com>

◆Murray, John ed. *American Nature Writing 1998* (SanFrancisco : Sierra Club)これがネイチャーライティングだといわんばかりのこのシリーズも賛否両論あるようですが、ことしもとりあえずシエラクラブから出ました。（高橋守）

◆Browning, Mark. *Haunted by Waters* (Athens: Ohio University Press) グレン・ラブ氏も誉めたこの作品は、釣り文学です。日本で人気が出るかも。（高橋）

◆Bass, Rick. *Where the Sea Used to Be* (New York:Houghton Mifflin) リック・バス初の長篇小説です。この作品の評価はちょっと別れるようですが、頑張れリック！（高橋）

◆Zwinger, Ann. *Nearsighted Naturalist* (Tucson: University of Arizona Press) 部分的には講演として発表されたものも含んでいる短い作品を集めた新作。割合と読み易くなっている。（高橋）

◆Berger, Bruce. *Almost an Island*(Tucson: University of Arizona Press)カリフォルニア州の南にあるメキシコのバハ・カリフォルニアの本。ここはかつてスタインベックもジャノビーも舞台として選んだ。（高橋）

◆ Mitchell, John. *Trespassing*(Reading, Massachusetts :Addison-Wesley)個人の土地所有の話。この人はかつて*Living at the End of Time*を書いた。（高橋）

◆*The Best of Outside: the first 20 years*(New York:Vintage Books) 冒険物の短編が中心。アビーもロペスも収録されている。（高橋）

◆Marshall, Ian. *Story Line* (Charlottesville: University of Virginia) 今年の一押し。軽妙でありながら真面目な文体は美しい。エコクリティシズムの最も重要な成果がこれ。ナラティブ・スカラーシップすなわち物語りを語ることを通してテキストや問題を研究しようという考え方の典型的な見本。（高橋）

◆Vale, Thomas R./Vale, Geraldine R. *Walking with Muir across Yosemite*(Madison:The University of Wisconsin Press, 1998) 長年ヨセミテに通い続けてきたトマスとジェラルダインのご夫妻が書いた「はじめてのシエラの夏」のナラティブ・スカラーシップ風の一冊。（高橋）

◆Elder, John. *Reading the Mountains of Home*. Cambridge: Harvard UP, 1998. Frostの"Directive"を著者自身の経験と場所（土地）に重ね合せたエッセイ。今注目を集めているNarrative Scholarship の一つの方向性としても読めるが、著者のエコクリィカルな視点とその詩的な散文が何より魅力的。（山城）

◆Kittredge, William, ed. *The Portable Western Reader*. New York: Penguin Books, 1997. モンタナの大御所 Kittredgeのアンソロジー。所どころに選者の嗜 好が興味深くAmerican Westの概念と交差しています。（例えば、London, Steinbeck, Morrisの作品など）特にGinsbergの"A Supermarket in California" などの選出などは膝をぽんと打ったような新鮮さがあります。（山城）

◆Murray, John A., ed. *American Nature Writing 1998*. San Francisco: Sierra Club Books, 1998. 既にシリーズ化されて今年で５年。１９の作品の内、７つがこのアンソロジーで初めて発表されています。（山城）

◆Walke, Cheryl. *Indian Nation: Native American Literature and Nineteenth-Century Nationalisms*. Durham, NC: Duke UP, 1997. （特に１９世 紀の）アメリカンナショナリズムのレトリックとネイティブアメリカンのディスコースの密接な関係を中心に論じている本。アメリカンナショナリズムを論じる際に、ネイティブアメリカンのディスコースが常にその重要役割をはたしていた非常にお薦めしたい一冊。（山城）

◆Kain, Geoffrey, ed. *Ideas of Home: Literature of Asian Migration*. Michigan: Michigan State UP, 1997. 場所と再定住の論議をアジア移民の問題へ向けるのは？必ずしも自然に焦点を絞ってはいないが、"sense of self," "conception of home, " あるいは "self-redefinition" など著者のキーワードはなかなか示唆に豊むように思える。（山城）

◆Matthiessen, Peter. *Lost Man's River*. New York: Random, 1997. フロリダのEvergladesを舞台にした Matthiessenの３部作の内の２作目の小説。 Watsonの死後、息子のLuciusが父の死因とその謎めいた生涯を探る。Matthiessenの作品に頻出の「暴力」と「自己探究」がEvergladeの見事な風景描写にはめ込まれた興味深い作品。（山城）

◆Cuomo, Chris J. *Feminism and Ecological Communities: An Ethic of Flourishing*. London: Routledge, 1998. エコフェミニズムの歴史的概観を含め、更に、従来のエコフェミニズムの前提であった「女性と自然の密接な関係」そして「自然と女性の共通する男性（支配）への従属，迫害の歴史」に疑問を投げかけ、環境倫理に新たな視点を持ち込もうとします。（山城）

◆Branch, Michael P., and Daniel J. Philippon, eds. *The Hight of Our Mountains: Nature Writing from Virginia's Blue Ridge Mountains and Shenandoah Valley*. Baltimore, MD: Johns Hopkins UP, 1998. 生態地域主義的 (bioregionalism)試みによるVirginia のBlue Ridge MountainsとShenandoah Valleyをめぐるアンソロジー。アメリカ史上文化的、政治的に重要な意味を持つVirginiaのコミュニティがどのようにエコクリティカル的発達の歴史として読み解くことができるかを教えてくれる。（山城）

◆Quigley, Peter. ed. *Coyote in the Maze: Tracking Edward Abbey in a Worldof Words*. Salt Lake City: U of Utah P, 1998. アビーをめぐる18にもわたる批評論文集。テーマはこのコレクションの編者であり、*Jeffers Studies*の編集員でもあるPeter Quigleyによると"Postmodernism、Nietzsche, ambiguity, and contradiction" (8)。 まだまだこれから深化が期待されるアビー研究の最近の集大成。（山城）

◆Pyne, Stephen. *How the Canyon Became Grand* (New York:Viking,1998)アリゾナ州立大学教授の肩書きをもつ著者の正体は、まったく独力で山火事の研究を成し遂げた元グランドキャニオン森林消防官。サイクル・オブ・ファイア・シリーズと呼ばれる一連の作品を通して世界中の山火 事を説明している。実に火は文学的である。（高橋）

◆Lopetz, Barry. *About this Life* (New York: Alfred A. Knopf, 1998) ロペスが今日までに発表したものの中から最も個人的な色彩の濃い小品を集めた作品集。ファンにはたまらない一冊。'A Short Passage in Northern Hokkaido'を収録。（高橋）

◆Henry Williamson, ed., *An Anthology of Modern Nature Writing*, London: Thomas Nelson & Sons LTD, 1936.1936年にイギリスで出版されたネイチャーライティング・アンソロジー（300頁弱）。 当時、イ

ギリスでこのようなタイトルの本が出ていたことに一驚。ハーディ、ハドソ ン、コンラッド、ロレンス、H. E. ベイツなど当時もっともモダンだった作家の作品 が集まっている。{この情報は岩永弘人さん（東京農業大学）から寄せられたものです。）（野田）

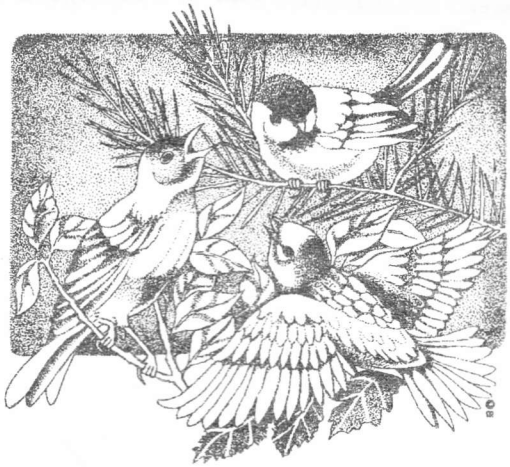
◆Gary Snyder. *A Place in Space: Ethics, Aesthetics, and Watersheds.* Washington D. C. : Counterpoint, 1995. ビート詩の運動を育んだ土地、サンフランシスコという場所の持つエネルギーについて語ったエッセイ、インドで行なった場所、共同体、慈悲についての講演、禅と詩作に関するエッセイ、アメリカのアースデイにおける行事の賑わいについての覚え書きなどを収録。現実的で具体的な環境問題への取り組み方から、透明度の高い自然詩論まで、スナイダーの思索は自由自在。（赤嶺）

◆Sturgeon, N., *Ecofeminist Natures: Race, Gender, Feminist Theory and Political Action.* New York: Routledge, 1997. いままでのエコフェミニズム論議と少し違うのはその政治性と政治的運動の関連に特に重点を置いている所であろう。著者によるエコフェミニズムの定義、その方向性の論議は従来のものの繰り返しである印象が拭えないが、"Movements of Ecofeminism" はとても読みやすく、今までのエコフェミを概観したい方にはお勧めの章。（山城）

◆Hogan, Linda, Deena Metzger, and Brenda Peterson, eds. *Intimate Nature: The Bond between Women and Animals.* New York: Fawcett Columbine, 1998. 女性は動物あるいは自然と親密"intimate"な関係を積極的に描こうとする。作家だけではなく、科学者、環境活動家など、全て女性が執筆。編者がLinda Hogan、Deena Metzger、更にBrenda Peterson というところもなかなか興味をそそられる。非常に良質のアンソロジーだと思います。（山城）

◆Duncan, David James. *The River Why.* New York: Bantam Books, 1984. Duncanという作家はこの他にも*River Teeth*などの作品で知られている作家で、Abbey ばりのユーモアと川と鱒釣りを巡る良質のエッセイを書いています。この作品も最初はSierra Clubから1983年に出版され、その後バンタムから１年後に再出版されました。今注目されている作家の一人です。（山城）

◆Balaban, John. *Locusts at the Edge of Summer.* Port Townsend, Washington: Copper Canyon Press, 1997. John Balaban はベトナムを中心に活動している詩人で、その視点は個人の道徳、責任というものを力強く執拗に追及していきます。いくつかベトナムの詩も翻訳しており、その独特の作品はCross-Cultural な世界を体現しています．非常に興味深い詩人。（山城）



North American Interdisciplinary Conference on Environment & Community

山城　新　ネヴァダ大学リノ

Center for Environmental Arts & Humanities主催による今回の学会はネヴァダ大学リノ校に於いて今年2月19日から21日の3日間でおよそ12の本会と50のセッションが開かれた．標題にある通り，環境と共同体の関係を中心に据え，発表内容も多岐に及び，講演の為に招聘された学者や作家達もDaniel Botkin, Michael P. Cohen, Keith Basso, David AbramからJudy Notte Temple, Pattiann Rogers, Benjamin Alire Saenzなどバラエティーに豊み，その成果はまず何よりもそのinterdisciplinaryな在り方によって十分に伺えると思う．

紙面の関係上，参加した全ての発表について触れることはできないのは非常に残念だが，個人的に特に印象深かった2つの本会発表ついて簡単に報告しようと思う．

・初日最後の本会のKeith H. Basso講演はいろいろ考えさせられる所が多かった．特に，David Abramとの「場所の感覚」(Sense of Place)をめぐる対立は現在のアメリカのEcocriticismの中でも依然問題視される人間と自然（あるいは場所）の間での自立性の問題に辿ることが可能だと思われる．

つまり，それは人間と場所（自然）との相互の関係(reciprocal)によって引き起こされるものであると言いつつも，Bassoが「場所の感覚」を，人間の観念や感情によって喚起されるものであると主張するのに対し，Abramが同様の相互関係を場所（自然，あるいは，more-then-human world）を強調する所から生じてくるの問題に現われていると言えよう．

場所や風景と言語の関係，それらの文化人類学的，特に民族誌学的研究（ethnographical studies)を重視するBassoの講演の多くは　彼の最近の著書において語られているものであった印象があるが，長年のアパッチ族の言語研究を通して培われたＢａｓｓｏの考察は作家である経験も合わせて，更に「場所の感覚」研究の幅を広げそうだ．特に，Heidegger, Sartre, (Edward) Casey の思想を通して培われた彼の「場所の感覚」の論議は非常に新鮮に感じた．

・2日目の午後のDaniel Botkinの講演は非常に注目を集めていたようだ．大まかな内容は表題にあるように，科学的情報あるいは知識をいかにして環境意識に役立てるかというものであり，Botkinによれば，Thoreauの例を上げて，科学

エコクリティシズム研究会（第7回）

◎日時：1999年3月28日（日）13時から16時30分

◎場所：広島大学総合科学部談話室（総合科学部一階
玄関より入り左に曲がりすぐの部屋）

◎テーマ：
1）*Literature of Nature: An International Sourcebook*（各地域の分担紹介）
2）*Ecofeminist Literary criticism: Theory, Interpretation, Pedagogy*. Ed. Greta Gaard and Patrick Murphy(University of Illinois Press) 分担紹介
なお1）2）について情報がほしい方はご連絡下さい。

17時より
『緑の文学批評――エコクリティシズム』（松柏社）
出版祝いのお食事会（場所は追って連絡）

研究会及びお食事会に出席・参加希望者はメール又は電話等で下記に2月20日までにご連絡下さい。
追って詳しい内容及び分担表をお送りします。

連絡先：
伊藤詔子　ITOH Shoko
外国語コース主任
広島大学総合科学部
Chair of Foreign language Course
Faculty of Integrated Arts and Sciences
Hiroshima University
university office phone 0824-24-6435
university office fax　0824-24-0755

e-mail address shokoi@ipc.hiroshima-u.ac.jp

*Literature of Nature: An International Sourcebook*ついに出版・好評発売中

(Ed. Patrick D. Murphy, Chicago: Fitzroy Dearborn Publishers, 1998)

まず、編者の一人である山里勝巳氏はじめ執筆者の生田省吾、秋山健、ブルース・アレン、木下卓、太田雅孝、高橋勤、加藤貞通、赤嶺玲子諸氏のご健闘に盛大なる拍手を送りたい。「インターナショナルな資料集」（InternationalSourcebook）というこの論文集において、65論文のうちの4論文を占めている日本の担当部分の存在感は大きい。ASLE-J創設以来のASLE-USとの固い絆を感じさせられる。

この論文集の第一の特色は編者のマーフィー氏も述べているように、自然を語る文学及び評論等を取り扱ったものにふさわしく多様性の重視という精神がその形式にも内容にも活かされていることにある。文学と場所（location）との多様な関係性に着目し、地理的な場所、歴史的な場所、個人の拠り所とする場所を視点として広く地球規模でその関係を読み解く作業が行われている。そうした作業の第一歩として今回は対象を過去二百年のものにしぼってある。従来の北米偏重であった批評の目を多様な地域にむけることによって編者が意図したように読者は様々なインスピレーションや知的刺激を受けるであろう。ポストコロニアリズム時代のコモンウェルス文学の新しい可能性の追求、＜島＞の文化や南北両極についての論文等々興味深い画期的な内容となっている。

1万6千円も高くはないのでは。＜横田＞

的知識を「美化」（aestheticize）するという方向が歴史的な流れであり，有効である，ということであった．

すでにこの分野において実績のある作家兼，科学者であるBotkinの雄弁さは際立っていて，質疑応答でも理路整然としたものであったが，その論点はさておき，やはりふと思うのはWestern Environmentalismの問題であった．Interdisciplinary な在り方というのが繰り返し言われるが，ここアメリカにおいてそれはしばしば北アメリカ（Anglo-America）の枠組み内であることが前提にあるような実感がある．

プログラム上とりあえずその点は配慮はなされていて，特にメキシコ地域に関連する発表が際立っていた．North Americaと付く時に多くの場合，その独特の文化的，社会的な背景を持つ証拠でもあるのだが，メキシコ地域は暗黙に除外されてきた．今回Homero Aridjisの講演を含めてどのメキシコ関連の発表者も強調していたのは，北アメリカ主導の流れに同調するのではなく，あくまでそれに組むという形で自分達の在り方を模索するという立場であった．

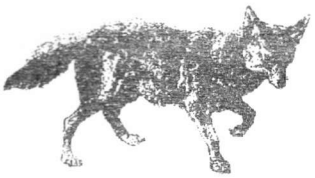
Western Environmentalismの大きな影響力の下でinterdisciplinary な在り方を模索する事は常に（皮肉にも）依存的にならざるを得ない．もちろん，どれだけその試みがその中で有効性を持てるか，というのは重要な問題であるが，それにはinterdisciplinary な在り方を更に超越した，新たな枠組みを必要としているように思える．その時にtrans-disciplinaryと言うのは易しいが具体的な在り方はまだまだ見えていないように思う．その問題はもちろん日本のネイチャー・ライティングの在り方，今後の方向性にも直接当てはまる課題であろう．

（次回のNorth American Interdisciplinary Conference on Environment and Communityは来年1999年の2月18-20日の日程でユタ州OgdenのWeber State Universityに於いて開かれる予定である．）

シラバス紹介

青山学院大学文学部英米文学科　　使用テキスト
科目名　米文学特講（8）　　著者名　Scott Slovic, ed.
担当者名　野田研一　　書名　Worldly Words: An Anthology of American Nature Writing
発行所　ふみくら書房　　定価￥2,060

スケジュール
前期：
1. 自然と文化のパラドックス：ネイチャーライティングとは何か？
〈現代ネイチャーライティングの諸問題〉
2. エゴからエコへ：神人同型論(anthropomorphism)と人間中心主義(anthropocentrism)
3. Edward Abbey, Desert Solitaireの提起するもの
4. Edward Abbey, "Wlderness and Freedom, Freedom and Wilderness"を読む
5. 荒野(wilderness)の思想
6. Annie Dillard, Pilgrim at Tinker Creek の提起するもの
7. Annie Dillard, "Living Like Weasels"を読む
8. ネイチャーライティングと近代の問題：交感(correspondence)の原理（1）
〈ロマン主義的自然の問題〉
9. 自然詩の記述様式：William Culen BryantとEmily Dickinson
10. 自然詩は自然詩か？：交感(correspondence)の原理（2）
11. 風景(landscape)の問題：風景画とピクチャレスク
12. アメリカン・ピクチャレスクと観光(1)
13. アメリカン・ピクチャレスクと観光(2)
後期：
1. Emerson, Nature (1836)を読む（1）
2. Emerson, Nature (1836)を読む（2）：Emersonianism
3. Thoreau, Walden (1854)を読む（1）
4. Thoreau, Walden (1854)を読む（2）
5. Thoreau, The Maine Woodsの問題
6. 交感(correspondence)の原理（3）
7. ネイティヴ・アメリカンの自然（1）：Linda Hogan, "Walking"を読む
8. ネイティヴ・アメリカンの自然（2）：Leslie Silko, "Landscape, History, and the Pueblo Imagination"
9. 場所の感覚(sense of place)とアメリカ文学
10. 田園主義(pastoalism)の問題と可能性
11. 画像としての自然/環界としての自然
12. 環境文学(environmental literature)とエコクリティシズム



講演会「チンパンジーとわたし」

（報告者：結城正美）

1998年11月20日夜、ジェーン・グドール博士と松永哲朗・京大霊長類研究所教授の講演会へ出かけた。チンパンジー研究の第一人者の講演会だけあって、会場の名古屋国際センターは開場前から人だかりができていた。スーツ姿の人、ハイキングにでも出かけそうな格好の人…とさまざまだが、来場者の多くは、前々日まで犬山市で開催されていた大型類人猿をめぐるシンポジウムに参加していた人類学者なのだろう。聴衆は予定の200人をはるかに上回り、300人近くにのぼったそうである。

「チンパンジーとわたし」と名付けられた講演会（朝日新聞社、SAGA<アフリカ・アジアに生きる大型類人猿を支援する集い>主催）で、グドール博士と松永教授はともにアフリカの野生チンパンジー共同体の親密性をテーマに熱っぽく語った。松永教授は、よく知られているチンパンジー（アイちゃん）の人工言語習得をめぐる研究「アイ・プロジェクト」にはあまり触れずに、西アフリカ（ギニア）の野生チンパンジーの母子の絆の深さについて話し、一方、グドール博士は東アフリカ（タンザニア）のチンパンジー共同体と環境破壊がかれらにもたらす影響について語った。お二人の話は、野生チンパンジーの関係性の深さに主眼をおくと同時に、人間社会の価値観、倫理観の根本的見直しを要求しているものでもあり、特にグドール博士の講演は、おそらく何百回とな

「文学と環境」第２号原稿募集

◎以下の要領で原稿を募集します。投稿規定を熟読の上、多数の投稿をお待ちしています。なお書式については、「文学と環境」創刊号を参考にしてください。

◎「投稿規定」

1. 内　容：文学と環境に関する未発表の研究論文・書評等（和文または英文）
2. 枚　数：(a)和文の場合は、Ａ４判用紙に横書きで30文字×30行とし、９～14枚程度。英文のレジメ１枚（１ページ。65ストローク×25行）を付すこと。
   (b)英文の場合は、Ａ４判用紙にダブルスペースで14～20枚程度。１ページは65ストローク×25行。和文によるレジメ１枚（30文字×30行）を付すこと。
   書評：和文の場合、横書きで30文字X30行とし、３～４枚程度。英文の場合２～３枚程度。（１ページは65ストローク x 25行）
3. 体　裁：表紙に題と氏名、所属先、連絡先（Tel、E-Mail等）を記入のこと。注は本文の終わりにまとめること。その他、MLA Handbook for Writers of Research Papers: Fourth Editionもしくは『MLA英語論文の手引き第４版』（北星堂）に準ずる。すでに口頭発表した場合は、その旨を末尾に記すこと。
4. 提出部数：５部（コピーも可）とフロッピーディスク（機種名、ソフト名を明示のこと）。
5. 宛　先：編集事務局（〒780-8520 高知市曙町2-5-1　高知大学人文学部　上岡克己）。
   ※封筒に（『文学と環境』応募原稿）と明記すること。
6. 締　切：第２号の締切は1999年３月20日とする。期日厳守。
7. 採　否：編集委員会が行う。
8. その他：(a)投稿資格は会員とし、投稿は１名につき１編とする（編集委員が依頼する場合は会員でなくともよい）。
   (b)提出された応募原稿は返却しない。
   (c)和文の場合、題名には英文タイトルを、また執筆者名にローマ字表記を付すこと。
   (d)書評を除き、原則として執筆分担金は仕上がり１ページにつき1000円とする。

く世界各国で繰り返されてきた内容にもかかわらず、チンパンジーに寄せる彼女の愛情と友情、そしてそうした心情の裏側にある人間中心主義的社会への憤慨と批判がストレートに伝わってくるものであった。

講演会のなかできわめて印象的だったのは、科学を専門としているお二人の語り口が、まさにストーリーテラーという言葉がぴったりな、魂の込められたものであったということだ。人間社会と動物社会・環境との関わりをめぐって、グドール博士、松永教授がそれぞれ何を信じ、何を訴えようとしているのかということが明快かつ力強く聴衆に伝わってきた、魅力ある講演会であった。

「文学と環境」創刊号　ＥＲＲＡＴＡ（正誤表）

	（誤）	（正）
p.2.	熱す	熟す
p.3.	Abraham	Abram
p.11.	1993	1933
p.19.	astrolger	astrologer
p.20.	Oeconomy	Oeconomy
p.29.	Heckel	Haeckel
	Thorean	Thoreau
p.37.	The Incomperable Land	This Incomperable Lande
p.44.	最終行のoutを削除	
p.50.	he (l.46.)	the
p.67.	Mane	Manes
	encounter with	withを削除
	experiences	experience

ASLE-Japanのメーリング・リストに参加しましょう。

ASLE-Japanの会員が情報交換や事務連絡をするためのメーリング・リスト、aslejを運営しています。メンバーはASLE-Japanの会員に限らせていただいていますので、登録は手動で行なっています。メンバー登録ご希望の方はtuti@icarus.ilcs.hokudai.ac.jp(土永)までメールアドレスをお知らせください。その際に、ご自分のメールアドレスをASLE-Japanの会員名簿に掲載して公開してもかまわないか否かをお書き添え下さい。なお、この登録申し込み方法は変更されることがあります。最新情報はhttp://icarus.ilcs.hokudai.ac.jp/aslej/aslejml.htmlでご覧下さい。

◎事務局より

1）昨年秋の広島における役員会、総会にて1998-1999年度の新役員が選出されました（別欄参照）。これまで役員としてご活躍下さった方々、有り難うございました。新たにお迎えした役員の方々、どうぞよろしくお願いします。引き続き役員を引き受けて下さった方々、もうひと踏ん張りよろしくお願いします。

2）同じく総会決定により、1999年度より会費が値上げされることとなりました。年額¥5.000。ただし、学生会員据え置き（現行¥2.000）。これは会誌『文学と環境』の発行にともなう諸経費の高騰のためです。どうぞご理解いただきたく存じます。

3 ）会費の納入状況がかならずしも芳しくありません。どうぞお忘れの方は、至急1998年度分（旧会費¥3.000、学生¥2.000）を振替用紙にてご納入下さい。ASLE-Jの活動、とりわけ会誌発行は皆さまの会費納入にかかっております。よろしくお願いします。なお、1999年度分の振替用紙は後日、別送させていただきます。混乱のないようご注意下さい。

4）1999年度大会開催につきましては、現在開催地、開催方法を検討中です。決まり次第、お知らせいたします。

◎研究発表募集！

Call for Paper at the 1999 Annual Meeting

ASLE-Japan/文学・環境学会第５回全国大会での研究発表をご希望の方は、４月３０日までに「タイトル」と「要旨」を添えて下記へ郵便でご連絡下さい。発表内容によってはシンポジウム形式、円卓セッション等になる場合もあります。その際には改めてご相談します。個人、グループを問わず積極的にご提案下さい。また、写真、絵画など文学以外のジャンル、メディアによるものも積極的にご提案下さい。展示室を準備する予定です。ご利用希望があれば同じく下記までご連絡下さい。

○必要事項：

1）タイトル＋要旨
【400字（日本語）、又は250語（英語）】

2）氏名、所属等、住所、電話番号、Fax番号、E-mailアドレス

○連絡先：
笹田　直人

○〆切日：1999年４月30日

from editorial staff

■編集上の不手際から、最後の頁にスペースが大きく空き、その分「編集後記」を沢山書かねばならないはめになってしまった。しかし印刷を頼む人と会う時間は刻々と迫り、とても今からスペースを埋めるだけの文章は書けそうにない。そこで私が属している電脳Hikin' Clubという句会（お遊びの要素を多分に含んだ句会だが、ルールのある遊びほど人を真剣にさせるものはないとはかの碩学ホイジンガの言葉である）で活躍する午睡（ごすい）の句を紹介したい。とくに自然を詠んだものを挙げる。

蟻くわえ後ずさりする天国（はらいそ）へ
真昼なり音吸い尽くす蟻地獄
食断ちし亀の甲羅に蒼き黴
落鮎の身からしたたる命かな
大蚊（ガガンボ）の脚を栞に欠伸かな
顧みずとも夕焼けのある気配
玉の露黒衣の蟻が身繕い
蜘蛛くわえ蜥蜴そのとき暴れ竜
巻き巻きて異名どこ吹く灸花（やいとばな）
白秋に紫紺点ずる野辺の花
さみしくて山深く入る桐の花
蝙蝠や絶対音感恋は闇
乳無尽大地母神の六月や
土壁に守宮の影やロブ・グリエ
雨蛙エナメル革に汚泥なし
豌豆の螺旋旅する小ダンテ

■ASLEニューズレターNo.7も皆さまのお陰で何とか発行できました。前号では「書誌情報」が有益だったとのご意見を各方面から頂きましたので、今号も掲載しましたが、時間の関係で整理した形で載せられなかったことが悔やまれます。情報を提供頂いた会員の皆さまどうもありがとうございました。ニューズレターは情報がありませんと発行できません。今後とも皆さまのご協力をお願いいたします。(J)

ASLE-Japan
文学・環境学会
Newsletter No.7
1999年２月１日発行

【発　行】
ASLE-Japan／文学・環境学会
事務局：立教大学　観光学部
野田研一　研究室内
〒352-0003 埼玉県新座市北野1-2-26
Tel. 048-471-7426 (直通)
E-Mail: noda@rikkyo.ac.jp

【編　集】
編集代表　大神田　丈二